密苗仕様の田植機4型式

ヤンマーが発表

普及・拡大を加速

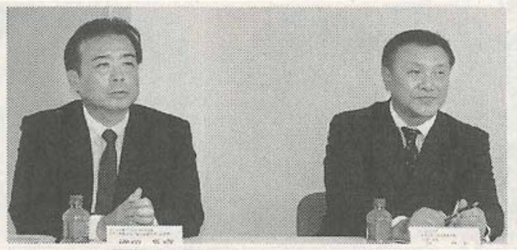
アグリライファー向け　車軸型ミニ耕うん機も

ヤンマー㈱（山岡健人会長兼社長）は10月31日、大阪・西天満の電子会館で、ホビー向けミニ耕うん機と密苗仕様田植機の新商品発表会を開催した。ミニ耕うん機はデザインをスタイリッシュに一新、今後とも底堅い需要が見込める車軸タイプ「YK－QTシリーズ」4機種。田植機は新型「YR－Dシリーズ」の追加仕様として、3年前から担い手農家・農試・ヤンマーが三位一体となって取り組んできた「YR－D密苗仕様」4機種を発表した。また、新たに4条植え田植機にも密苗キットを設定し、今後育苗・田植え作業の時短とコスト低減に向けて、密苗の拡大・普及に積極的に取り組む姿勢を示した。

山岡会長兼社長

発表会には増田長盛執行役員国内営業本部長と鈴木哲也農機推進部長が出席した。初めに増田本部長が新商品の市場背景、日本農業の現状など説明したあと、鈴木部長が商品説明を行った。

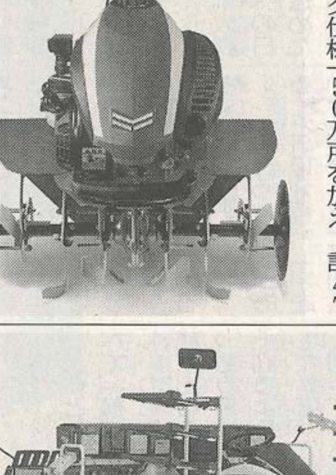
ミニ耕うん機はYK300QT（標準）／YK300QT－B（握るとバック）／YK300QT－D（デラックス）／YK300QT－S（スパイラル＝受注生産）4タイプを発表。11月1日から順次販売していく。デザインは「YTトラクタ」などのデザインも手掛けるKEN OKUYAMA DESIGNが担当した。



会見する増田国内営業本部長（左）と鈴木部長（右）

特徴は低振動爪の採用でハンドルの上下変動幅を従来機に比べ約40％軽減したこと。ハンドルの上に固定したコップの中の水がアクセル全開でも、振動するだけで外にあふれないことを動画で紹介した。また、作業中にハンドル右のレバーを握るとアクセル回転が自動で低速に戻り後退する、ヤンマー独自の「握るとバック」を搭載。

価格は、機能を上げながら標準仕様（YK300QT）で9万円を切り（8万9800円＝税抜き）、握るとバック仕様でも変速を1段として現行機より2万6000円安い低価格設定とした（YK300QT－B＝11万9000円）。



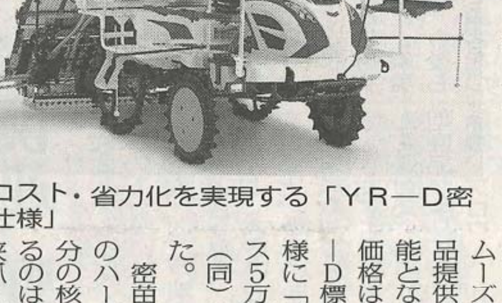
車軸型ミニ耕うん機「YK300QT」

注目されるのは、市場ターゲットとして販売農家、自給的農家を合わせた220万戸のほか、新たに同社が独自に「アグリライファー」と呼ぶ非農家の家庭菜園愛好家250万戸を加え、計470万戸としたこと。より幅広い層をターゲットに「農」の楽しさを伝えていくとしている。

アグリライファーをターゲットに拡販を目指すミニ耕うん機

初年度販売計画は4タイプで6000台。

密苗仕様田植機は、栽培技術（ソフト）と機械技術（ハード）の組み合わせで完成したもので、最終売出し前にあたり、今春から密苗モニター実証試験を各地の大規模農家、農試を中心に東北から九州まで342カ所で実施し、「3反苗つぎ無補給」「収量は慣行とほぼ同量」などの結果を踏まえ、「密苗による省力化・低コスト技術に対し、高い評価を得た」（鈴木部長）ことから、満を持して発表、12月1日から発売する。



低コスト・省力化を実現する「YR―D密苗仕様」

新型の「YR－Dシリーズ」に密苗仕様を追加することにより購入コスト、組付工数の低減、スムーズな商品提供が可能となる。

価格はYR－D標準仕様に「プラス5万円」（同）とした。

密苗移植のハード部分の核になるのは①幅狭爪・プッシュロッド②植付センターケース③幅狭レール取り口・幅狭ロングガイドの新技術3つで、精密なかき取りと高精度な移植を実現。また、密苗だけでなく慣行苗も植え付け可能。

鈴木部長は、社内で行った慣行と密苗の30㌃田ほ場における作業結果を紹介し、使用苗箱数は61％削減、作業時間は18％削減、補助者時間は90％削減できたと報告し、「作業効率2割アップ、ワンマン作業で補助者不要」として、「密苗は大規模専業農家のみならず兼業農家のコストダウンと省力化に貢献する。ヤンマーとしてこの技術をしっかり提案し、普及させていきたい」と強調した。

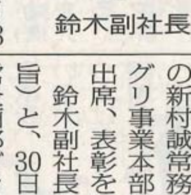
発表したのはYR5D－XU－ZFT／YR6D－XU－ZFT／YR7D－XUZFT／YR8D－XU－ZFT。それに「YR－J／RJシリーズ」に対応した密苗キットMN－4J／MN－5J／MN－6J。

密苗仕様田植機の来春の販売計画は500台。

ヤンマー

YT3トラが金賞

16年グッドデザイン賞



鈴木副社長

ヤンマー㈱は10月28日、同社のトラクタ「YT3シリーズ」が2016年度グッドデザイン金賞（経済産業大臣賞）を受賞したことを明らかにするとともに、鈴木岳人代表取締役副社長アグリ事業本部長の受賞談話を発表した。同日、東京・港区の東京ミッドタウンで行われたグッドデザイン大賞発表会には、同社の新村誠常務執行役員アグリ事業本部副本部長が出席、表彰を受けた。

鈴木副社長の談話（要旨）と、30日に同社の経営企画部ブランドマーケティンググループの八木洋介専任課長が行ったプレゼンテーションの内容を紹介する。

鈴木副社長の談話＝グッドデザイン金賞を受賞できましたこと、心から感謝申し上げます。また今回の受賞では、商品のデザインに加え、農業にデザインを持ち込んだことを高く評価していただき大変嬉しく思います。

農業従事者の皆様に、農業という仕事にもっと「誇り」を持ってもらう。YTトラクタが日本中で活躍すれば、今まで農業に関心がなかった人にも、興味を持ってもらえる。興味を持つ人が増えれば、農業のすそ野が広がる。農業の未来も切り開けると、私たちは考えております。

この一台には、まさに100年に渡って日本の農業と共に歩んできた、ヤンマーのモノづくりへの「誇り」が集約されています。そしてヤンマーは、これからも農業の可能性を提示し、たくさんの人々が、農業という仕事に「誇り」を感じてもらえる、そんなモノづくりを進めていきます。

◇

八木専任課長のプレゼンテーション要旨＝今回のグッドデザイン大賞へのノミネートが農業に光を当てていただいたと、たくさんの農業関係者が自分のことのように喜んでくれました。

農業を元気にするために、農業を持続可能な産業にするために、いま、必要なもの、それは「誇り」だと私たちは考えます。農家の皆さんに、所有する「誇り」を感じてもらえる、そんなトラクタを作ろう。開発から生産までメンバー全員が〝農業という仕事を「誇り」にしてもらおう〟、目指すゴールはひとつでした。この一台にはまさに、100年に渡って日本の農業と共に歩んできた、私たちヤンマーのモノづくりへの「誇り」が集約されています。

グッドデザイン「大賞」をいただくことは、農業の地位を上げる力になり、それが日本の抱える社会課題の解決にもつながります。皆様、日本の農業の誇りのために、ぜひ力を貸してください。ヤンマーはこれからも、農業という仕事に「誇り」を感じてもらえる、そんなモノづくりを進めていきます。

YT357の前で記念撮影する新村常務執行役員㊤、プレゼンテーションを行う八木専任課長㊦

ロボットトラ開発

ロボット大賞でプレゼン

ヤンマー

既報の通り、ヤンマー㈱は、第7回ロボット大賞にてロボット大賞「農林水産大臣賞」を受賞し、10月19日に東京・有明の東京ビッグサイトで行われた表彰式にて表彰された。同賞は今回より新たに創設され、大臣が行う政策上の観点から、最も優秀であると認められるロボット等に授与される賞である。

表彰式後には、アグリ事業本部経営企画部ブランドマーケティンググループの三原真紀子部長と同本部開発統括部農業研究センター先行開発グループの横山和寿専任課長による「ロボットトラクタの研究開発」についてのプレゼンテーションが行われた。

最初に三原部長は「今後は農業を取り巻く環境の変化が進み、少ない農業生産者が、増え続ける食料需要をまかなう時代がくる」とし、「ヤンマーは人とロボットによる協調作業で、農作業を誰でも、正確に、効率良く、行えるロボットトラクタを開発してきた」と述べた。今回受賞した、随伴作業でロボットトラクタと有人トラクタの2台をオペレータ1人で動かすシステムを紹介するとともに、将来の完全無人化・複数台無人運転を見据えて、圃場の近くで安全監視しながらトラクタを動かすことができるシステムも構築していると説明した。続いて、横山課長によるタブレットを使用した、随伴トラクタの作業設定についての説明がなされた。

プレゼンを行う三原部長（左）と横山課長（右）

最後に三原部長は「ヤンマーは独自のロボット技術、商品技術、ICTを駆使し、超省力、高品質生産の実現により、農業経営をサポートしていく」と今後に向けた対応、方向を語った。

丸山製作所

女性社員がドローン操縦

全農千葉の展示会で　スカイマスター実演

スカイマスターの実演、フライトが始まると人垣ができ注目度は高い

㈱丸山製作所（尾頭正伸社長・東京都千代田区内神田3の4の15）は今年6月、国内農機メーカーとして初めて農薬散布用のドローン「スカイマスター MMC940AC」（液体散布用マルチローター）を発表し、各地で関心を集めている。農業分野における注目技術として今後の普及に期待がかかるが、その利用には操縦免許の取得が必須。また、現場で使うには機体登録、飛行申請（誰がいつどこで飛ばすか）が必要など、さまざまな付帯事項がつく。

こうした状況下、同社は着実な普及定着を目指して社内体制の整備に取りかかっており、今後2年間で全営業社員に操縦資格を取得させ、また、社内に教習ができる資格者も養成し、自前でスカイマスターに関する知識習得ができる、かつデモ依頼などに対応できる体制を整えていく方針だ。

それら同社活動の最先端にいるのがカスタマーサポート部技術サービスグループの熊ノ郷早妃氏と営業推進統括部営業推進課の福島由香氏。9月上旬に3日間の講習を受けて資格を取り、熊ノ郷氏は同社千葉工場への見学者対応、福島氏は圃場実演でのデモ対応などで飛行操縦を行ってきた。

そして10月28日、全農千葉県本部などが開催した第41回農業機械大展示会の会場で、多くの農家を前にした初フライト、実演を進め、その腕前を披露。当日は千葉営業所の占部晋也所長が機械の説明に当たり、熊ノ郷氏がナビゲーター、福島氏がオペレータを務めた。

当日ナビゲーターを務めた熊ノ郷氏（右）と、オペレータの福島氏

受講した時の感想を聞くと、両氏ともに集中力を持続させることが難しかったとふり返り、「それが切れた時は機体の動きなどから何となく分かるんです」（熊ノ郷氏）、「先生からいつも集中力が短いといわれていたんで、練習でも本番でも集中し続けることが大変でした」（福島氏）と。また、今後、農家に教示する立場からは、「安全第一」を掲げる。決まっているスケジュール範囲では、これから宮城県や栃木県での実演が待っているとのこと。

集中力、緊張感を持って操作に当たらなければならないと同時に、面白さも体感しており、「私はこの仕事を与えてもらってよかったなと感じています」と福島氏は笑顔をみせる。

片や熊ノ郷氏はスカイマスターの特徴をあげながら、「速度制御や農薬を均等に撒く点についてもしっかり反応してくれる機械なので、操作しやすい製品になってます」とPRも怠りなし。

米国ATV本格販売

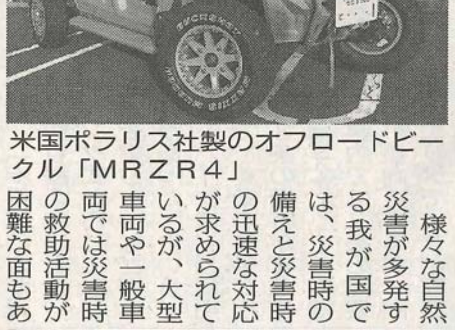
被災地にオフロード車を

ホワイトハウスオートモービル

㈱ホワイトハウスオートモービル（木村文夫社長・愛知県名古屋市名東区本郷3の139）は、国内で多発する自然災害に対応して、輸入元と販売元として取り扱うアメリカのポラリス・インダストリーズ社（以下ポラリス社）の軍事用車両部門であるポラリス・ディフェンスの代表的オフロードビークル「エムレザー4（MRZR4）」の販売に力を入れる。

このほど国内で大型特殊自動車としてナンバーを取得、公道を走行することができるようになったためで、10月19～21日に東京ビックサイトで開催された危機管理産業展RISCONにも出展、注目を集めた。

米国ポラリス社は、泥濘地や渓流、岩場や雪道などあらゆる悪路を走破できる全地形対応車（ATV）の業界において北米ナンバーワンのシェアを誇る企業。この「エムレザー4」は、同社で開発・製造している小型軽量オフロード車両「RZR（レーザー）」をベースに、米軍のUSSOCOM（特殊作戦軍）からの要望で、被災地など過酷な環境でも対応できるよう開発された小型軽量モビリティ。



米国ポラリス社製のオフロードビークル「MRZR4」

様々な自然災害が多発する我が国では、災害時の備えと災害時の迅速な対応が求められているが、大型車両や一般車両では災害時の救助活動が困難な面もある。こうした状況に鑑みてポラリス社が製造する「MRZR4」を市場投入するもので、災害救助車両に求められる機動力をアピールしていく。

搭載エンジンは2気筒4ストロークDOHCガソリンエンジン875cc・オンデマンド式AWD／2WD。機体寸法は長さ359×幅155×高さ188㌢、重量900㌔、最大積載量200㌔、乗車定員最大4名、カラーはミリタリータン。

台湾から秋田展視察

タイガーカワシマ　川島社長が案内

台湾から視察に訪れた林理事長（右）を迎えて、秋田農機協・白石会長（中央）と川島社長（左）

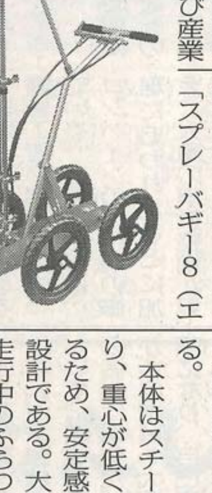
10月29日、秋田県湯沢市で開かれた秋田種苗交換会に、台湾の農業機械メーカー・販売店の集まりである「台湾農機工業同業公会」（林永富理事長）メンバー17名が訪れ、秋田県農業機械化協会の白石光弘会長を表敬訪問した後、最新の日本農機を視察した。

林理事長が経営する日農牌農業機械と取引があった㈱タイガーカワシマ（本社・群馬県邑楽郡）の川島社長の案内で、メンバーは各小間を熱心に見て回った。林理事長は「日本の農業機械が一堂に会する秋田農機ショーの会場で見学することができ、非常に参考になった。台湾でも先週（10月22～24日）雲林県で台湾全国農機資材の展示会があり、現地代理店を通して多くの日本メーカーさんに出展して頂いた。これからも、日本と台湾の交流を深め、両国の農業の発展に努めていきたい」と話していた。

低重心で安定感

スプレーカート　スプレーバギー8

永田製作所が発売



手動式スプレーカート「スプレーバギー8」

㈱永田製作所（田中寿和社長・大阪市西淀川区千舟1の5の41）は、噴霧器部品と農業及び産業機械の専門製造販売を行っている。同社が発売する手動式スプレーカート「スプレーバギー8（エイト）」は、施設園芸における立木野菜・花卉用の薬剤散布に最適である。

本体はスチール製であり、重心が低くなっているため、安定感を備えた設計である。大型4輪で走行中のふらつきがないため、操作性が大幅にアップした。

収穫台車に合わせた車幅のサイズで、ハウス内での取り扱いが容易である。また、ハンドルの高さは作業者に応じて調節できる。

散布用噴口は扇型ノズルが左右に8個搭載。角度を自在に調整することができるため、作物別に合わせた作業や葉裏散布を実現した。ノズルも斜め前方に向いていることで、作業者への負担を軽減する。

止水のために噴霧ロストップ機能が付いており、成長に合わせた散布でロスを解消する。左右の噴霧管については、ハンドル手元のバルブを操作することで、片側散布に切り替えることができるなど省エネ・低コスト作業にも貢献する。

主な仕様は、▽寸法＝全高1745×タイヤ幅410×奥行810～990㍉▽ハンドル高さ＝800～980㍉▽重量＝16・4㌔。

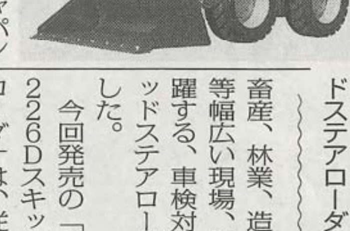
問い合わせは同社☎06・6473・0835まで。

幅広い用途に活躍

キャタピラージャパン

スキッドステアローダ発売

キャタピラージャパン㈱（東京都世田谷区用賀4の10の1）は、多彩な「Catワークツールアタッチメント」の装着により建築、道路、農業、畜産、林業、造園、除雪等幅広い現場、用途で活躍する、車検対応のスキッドステアローダを発売した。



Cat 226Dスキッドステアローダ

今回発売の「Cat 226Dスキッドステアローダ」は、従来機のモデルチェンジで、排出ガス規制はオフロード法2014年基準に適合し、新たにミラーなどの装備品の装着によって、大型特殊自動車、小型特殊自動車への対応が可能となった。

スキッドステアローダの主な特徴は次の通り。

①ミラー、ウインカー付走行ライト、後退灯、ナンバー取付枠の装着によって、大型特殊自動車、小型特殊自動車に対応し、公道での作業、公道を使っての現場間移動が可能となり、様々な現場、用途でさらに活躍の幅を広げる②クリーンな排出ガスと燃費低減を両立したCat C2・2ディーゼルエンジンを搭載し、定評のある電子制御テクノロジーに加え、NRS（NOx Reduction System）や最新のアフタートリートメント技術の導入により、高い環境性能を実現③その場旋回が可能な高い小回り性、最高速度17・8㌔／時（大特仕様）、14・0㌔／時（小特仕様）の優れた機動性等により、様々な現場、用途で優れた作業性能を発揮―など。

「大特仕様」タイプの主な仕様は次の通り。

▽運転質量＝2720㌔▽バケット容量＝0・40立方㍍▽常用荷重＝630㌔▽ホイールベース＝1055㍉▽全長（バケット地上水平）＝3320㍉▽全幅（バケット）＝1740㍉▽全高（キャブ上端まで）＝2040㍉▽ダンピングリーチ（バケット角度45度）＝620㍉▽ダンピングクリアランス（バケット角度45度）＝2025㍉▽最低地上高＝175㍉▽最大ダンプ角度＝47度